京都大学新聞

学生団体
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
京都 (771) 8111 (761) 2054 学内直通 2441
振替・京都3909

コンパの御相談承ります
旅館 きよす
寺町通今出川上ル
TEL (231) 5121 (231) 5122

新たなる教育労働者運動へ向けて

〈上〉

教育闘争シンポジウム

「教育労働者の教育闘争と労働者運動の発展を労働者権力の樹立へ」という大胆ともいえるテーマのもと、日本教育新聞労組を中心とする闘う労働者自身によって持たれたシンポジウムは、現在教育において中教審路線として進行する再編を政府ブルジョアジーの階級的攻撃として把え、闘う教育労働者の反撃を提起する。

全共闘運動の進捗と学生によって極限的に展開された教育闘争の敗北は、教育労働者との共同の教育領域をめぐる闘いによる学生運動の階級的発展として対象化されることによってその突破の方向を見いださんとしている。一方教育労働者においても、その組織である日教組内の運動（国民教育運動・教育者運動）が一切現在の教育再編に対決できずに、いまや、闘う労働者にとっても、階級的突出を開始していることが各戦線から報告された。日本教育新聞のたどった歴史的軌跡と教育新聞労組の闘いは、現在の教育をめぐる状況をあますところなく照し出していといえるだろう。

編集部では今回から二回にわたって、シンポジウムのうち、基調報告、現場報告、まとめの部分を掲載する。さらに今後、教育労働者運動の歴史的原理と現在的課題について闘う労働者からの提起を受けて、さらに教育闘争の深化を勝ちとってゆきたいと思う。（学園評論参照）

（編集部）

基調報告

〈日本教育新聞労組〉

直江副委員長

司会　沖縄、三里塚を始め、また、教育現場などいろいろな所で闘いが、展開されていますが、われわれはこういった闘いをこのシンポジウムの中へ集約していくことによって、日本教育新聞闘争・教育闘争を深化させ、また、新しい連帯、新しい労働運動といったものをいかに経験的に切り開いていくかということを考えていきたいと思っています。

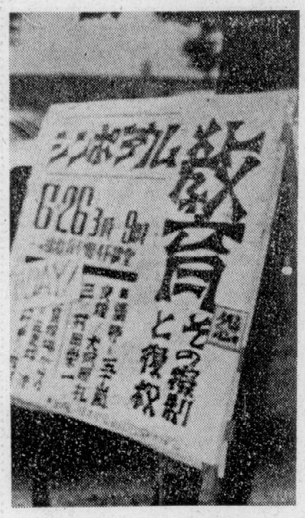
そういうような意味で、きょうシンポジウムを開いたわけです。

そこでは、日本教育新聞労組の直江副委員長の方から基調報告を受けます。

1　教育の帝国主義的再編とは

直江　基調報告に入る、まえに、ほんらいならば、ここで基調報告を行なうべき、沢田委員長が現在不当にも拘禁されていることを残念ながら報告しなければなりません。

沢田委員長は、ちょうど一日前二十四日に、われわれ教育新聞労組と連帯、共闘関係にある、学芸通信闘争委員会のメンバーが含まれている東京地裁の、十、十一月闘争第十回グループの統一公判に傍聴者として参加し、斉川裁判長の強権的訴訟指揮に対し、傍聴席から抗議の声を発したところ、これに対し強制的に退廷を命じられたばかりでなく、不当にも七日間の監置処分という形で現在小菅拘置所に、拘禁されているわけです。



一連の政治闘争に対して、このようなブッシュ的なかつ、公然として、進められている司法権力の横暴に対し、われわれは、断固とした抗議の意志を明らかにするとともに、こうした司法権力の露骨なわれわれ闘う労働者に対する圧殺策動に対し、断固としてひるむことなく今後も闘い抜いていくことをこの場をかりて宣言しておきたいと思います。

したがいまして、沢田委員長にかわりまして、副委員長の私がかわって基調報告を行なっていきたいと思います。

現在の日本独占資本による教育の帝国主義的再編成の野望は、なにも先月末はの新教特法の強行採決や、あるいはさる十一月の中教審答申等を待つまでもなく、すでにここに集められている大くの教育労働者、及び現場の庶点で果敢な闘いを続けている労働者諸兄にとってはかねり前からこうした答申の野望を先どりした形で現場に顕在化しているということは、はっきりと認識されていることだろうと思います。

とりわけ十年前に、いわゆる、マンパワーポリシーという、人的能力の開発計画として、経済審議会の答申が出て以来、教育再編の野望は現場において着実にその基礎をかためてきたということができると思います。

こうした中では、自主的教育が制度的に社会、国家のあり方を先導していくといった教育の理念は打ち消され、ひたすら資本の要請をうけた政治権力が、教育を支配と侵略の武器に使っていくという文字どおりの帝国主義的再編が進行していくことの事実だろうと思います。

答申の現場への浸透徹底不可欠な要請として、本格的な教員定配と教育労働運動の圧殺が、考えられますが、これは新教特法との関連で考えられています。

新教特法とはこうした任務を正しく遂行するものとして担える必要があるわけです。新教特法については教師の方々の中から現場報告等々として具体的になされるだろうと思いますが、ここでは要点をマトメ、これまでの討論の中、あるいは教師の方々の中から現場報告等々として具体的になされるだろうと思います。

新教特法の条文中にはっきりと明示されているように、教職員規定をはじめとした形で現場に顕在化しているということは、はっきりと認識されていることだろうと思います。

とりわけ十年前に、いわゆる、マンパワーポリシーという、人的能力の開発計画として、経済審議会の答申が出て以来、教育再編の野望は現場において着実にその基礎をかためてきたということができると思います。

こうした中では、自主的教育が制度的に社会、国家のあり方を先導していくといった教育の理念は打ち消され、ひたすら資本の要請をうけた政治権力が、教育を支配と侵略の武器に使っていくという文字どおりの帝国主義的再編が進行していくことの事実だろうと思います。

そして、最後にこれらのいくつかの特徴を支えるものとして、社会教育との密接な連携について指摘しなければならない点と思います。

すなわち、社会教育審議会の、放送大学構想、これは、現在の青年労働力不足の問題を青年労働力の再開発で補なうとするばかりでなく、今後のすべての労働力を生涯にわたって新鮮な労働力商品として生産現場へ送りこむための生涯教育機関として設置し、このことで実力主義導入の基礎を固めようとするものであろう。

中教審答申が一つしか社会教育全般の再編構想に密接に関わっていないことは、以上特徴的な点をみなるるだけでも、明白なことであろうと考えます。

中教審答申が単なる、教育機関の問題、または国民的な教養という範疇にも、教育問題とされて、すべての労働者に共通する、労働力の再編構想として、まさにその姿を現わしていることをここでは強調しておきたいと思います。

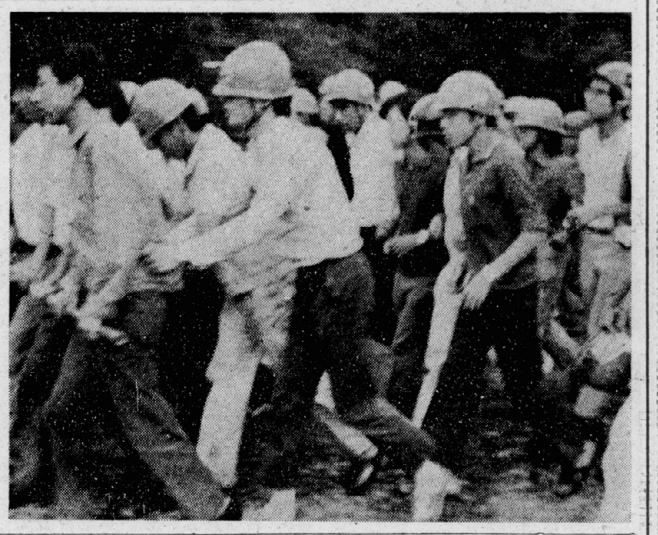
答申の野望を先どりした形で現場に顕在化しているということは、はっきりと認識されていることだろうと思います。

とりわけ十年前に、いわゆる、マンパワーポリシーという、人的能力の開発計画として、経済審議会の答申が出て以来、教育再編の野望は現場において着実にその基礎をかためてきたということができると思います。

こうした中では、自主的教育が制度的に社会、国家のあり方を先導していくといった教育の理念は打ち消され、ひたすら資本の要請をうけた政治権力が、教育を支配と侵略の武器に使っていくという文字どおりの帝国主義的再編が進行していくことの事実だろうと思います。

教員の労働者性とは？

―その内実が問われている



そしてまた、答申でもはっきりと明示している通り、校長を筆頭とする、教育労働者主任、学内主任教科主任または、生徒指導主任などの管理上、指導上の勝制を強化する。ここにもある通り、教育現場の重層的な管理強化の問題、それは現在、現場でも進行しつつある、五等級制度による徹底した給与面での操作とこれをエサにした教員自身の出世競争激化と体制イデオロギーの教員末端までの貫徹として図式化できると考えます。

すなわち、文字通り教育現場より完成的な形態として、現われてきた、国家統制以外のなにものでもないだろうというふうに指摘できると思います。

さらに、これらの中で、教員養成の全国的かつ画一的な一貫化ということが指摘できますが、これは、目的大学による、教員養成の徹底した、技能訓練としての位置付けと、主任者研修のスパルタ的徹底、または、指導制度等々のインターン制度の改編という形で補完されながら、もちろん大学教育全般の資本的構想と一体となって、教員育成の全国化、画一化、それらによる一貫化ということが、この中教審答申の中で、はっきりと示されていると思います。

そして、最後にこれらのいくつかの特徴を支えるものとして、社会教育との密接な連携について指摘しなければならない点と思います。

すなわち、社会教育審議会の、放送大学構想、これは、現在の青年労働力不足の問題を青年労働力の再開発で補なうとするばかりでなく、今後のすべての労働力を生涯にわたって新鮮な労働力商品として生産現場へ送りこむための生涯教育機関として設置し、このことで実力主義導入の基礎を固めようとするものであろう。

中教審答申が一つしか社会教育全般の再編構想に密接に関わっていないことは、以上特徴的な点をみなるるだけでも、明白なことであろうと考えます。

答申にうたわれる、放送大学構想、これは、現在の青年労働力不足の問題を青年労働力の再開発で補なうとするばかりでなく、今後のすべての労働力を生涯にわたって新鮮な労働力商品として生産現場へ送りこむための生涯教育機関として設置し、このことで実力主義導入の基礎を固めようとするものであろう。

中教審答申が一つしか社会教育全般の再編構想に密接に関わっていないことは、以上特徴的な点をみなるるだけでも、明白なことであろうと考えます。

答申の野望を先どりした形で現場に顕在化しているということは、はっきりと認識されていることだろうと思います。

とりわけ十年前に、いわゆる、マンパワーポリシーという、人的能力の開発計画として、経済審議会の答申が出て以来、教育再編の野望は現場において着実にその基礎をかためてきたということができると思います。

こうした中では、自主的教育が制度的に社会、国家のあり方を先導していくといった教育の理念は打ち消され、ひたすら資本の要請をうけた政治権力が、教育を支配と侵略の武器に使っていくという文字どおりの帝国主義的再編が進行していくことの事実だろうと思います。

料「僕は資こう思う」

…ぼくが永久的に労働者であるかぎり自分の生活、権利を開拓し、守っていくためにはつねに資本と国家権力と対決していかなければならないと考える時、労働者として、逆重要な課題であり、仲間との連帯であった。そこでの闘いの中でぼくは労働者としての不変の意識を持ったということであり、逃避であり、非組・職制と結局同じ道をたどることになる。

彼らにあびせた罵倒がぼく自身にふりかってくることになる。

（中略）

ぼくが労働運動の真似ごとを始めたのは五年前ある職場で臨時労働者として、その時ぼくを決起させたのは賃金であり、職制の圧政であった。

（中略）

ぼくが労働者意識に疑問を持ったことはなかった。

しかし、いまのぼくは、わずか年収従業で生活を切り詰めながら恒常生活、闘争新聞、ビラ、闘争ノート、八日に至る迄でぼくは一度も自己の労働者意識に疑問を持ったことはなかった。

しかし、いまのぼくは、わずか年収従業で生活を切り詰めながら恒常生活、闘争新聞、ビラ、闘争ノート、八日に至る迄でぼくは一度も自己の労働者意識に疑問を持っている。

いまぼくは、自己の労働者意識を問われている。ぼくたちは、資本から労働者庄殺のための最も卑劣な手段である強制解散＝組合員全解雇という攻撃をうけているけれども、そこでぼくたち

解体されず残るもの
高橋和巳氏の苦闘の後に

階級運動が直面し、生起した問題の深さに対し、常に思想的提起を行いつづけた高橋和巳氏の死後多くの人々がその思想を受けとめようとしているが、その内容は必ずしも的確であるとは言いえず、むしろ、思想的現実から疎外されたものが目立つ。高橋氏の思想を引き受け、現された課題を突破するためにも、われわれの基本的な態度を明らかにしていきたい。

（編集部）

高橋和巳氏が亡くなられてからやく一年。「文学者の死」であった、という以上に、戦後の日本の精神史を生きぬき、とりわけ六十年代から七十年代へと至るひとつの転換点ともいえるべき時代にあったある戦後知性の矛盾と限界を、そして自己の思想に引責責任を負うべき急き、敢えて自らの志向を全うすることによって斃れたかのようなその死に様のもつ象徴性が、われわれを含めた多くの人々に少なからぬ衝撃を与えた。

そして今、その衝撃は、一般に死が換起する喪失感や悲嘆的な心情への拘泥を超越して、逆にわれわれ、「生き残っている者」へ、問題の多さと深さをつきつけるかのように、埋葬されたかに思われて葬かに凝固しつつあるかのようだ。

とりわけ、高橋氏が残された思想家であったというのみならず、戦後知性の腐敗と矛盾と限界を、その運動の過程で次々と決定的に暴露し批判していった全共闘運動に主体的に関わろうとし、生起してくる問題の所在を自らの課題として対象化するなかから明らかにし、かつ突破の方途をも提出しようとした思想的営為は、敬服に値する。そして、氏が感受した現実の悲惨さとそれの苦悩への提起は方法的限界を有しながらも、あくまで問題そのものが現出する限り、われわれに課せられたものであるということの自覚だけは明らかにしておかねばならないだろう。

□　□　□

この二年間の間に出された、高橋和巳氏に関する多くの記述は、その死によって直接にもたらされた深い喪失感を表現するものではあるが、一方その内容が高橋氏の思想の核心に迫ろうとするものであるのかどうかは、必ずしもつきつめられたものであるとは言い難い。ましてそれがある意味性をもった、未来へ開かれた行動的な指標としての提起は全く見られなかったと言ってもよい。

そればかりか、高橋氏の思想を語りつつ、その思想に大きく影響を与えつつ、ついに自らの思想的根拠にまで問題を深めずにおれなかった全共闘運動との関りと、その過程で顕然化された問題の把握に至っては、全くの天上からながめるものの以上ではあり得ず、ある時は安易にして軽薄で思想の真意から逃亡したり、撤退したり、「聖人ジャーナリズム」とは、決してその問題自身の所在を理解しているとは思えない、情緒的現実への思想的現実へのあまりの無自覚。

思想的現実へのあまりの無自覚

再度、文学的精神の徹底した解体へ

は、まさにこの書評が高橋氏の死後、弁証法に称して観念の世界へ自らが全く新しい何者かに変ることができるかのように夢想する人々の夢想の中にしかない。

桶民は、そのようにして反逆の精神の中にあるものであるということ、及びこれが学生運動をしている人の感性の一部を代表しているだろうということ、が感想的意見として述べられている。

最初に言われているところの事実誤認（死後に書かれたものかどうかは自信がないはわかるはずだ）はさておき、あのような形でとりあげられたことについての桶民氏の反感については、内容が全く展開されていないので反論はしないが、少くとも氏が語ったところの「全面否定」に関しては、われわれの基本的な態度を改めて返せば事足りる。

不充分ながらもわれわれが高橋和巳氏との実際の問題をも通じて明らかにしつつあったものは、すでに時代は、知識人の思念の弁証によっては何をも解決ができない所まで来ているということであり、そのことの論理的な根拠は、「知識人存在とその方法的精神―文学的精神」に求められるものの――にあるという冷厳な思想的現実であり高橋氏にあっては「わが解体」はまさに知識人の解体へと進まざるを得ないという必然性を体現しつつあったということである。

思想の現実的生かしは、まさに、われわれと知識人一般との間に決定的な乖離を生じさせているし、桶民氏が言うところの「全面否定」はまさにそういった位相における批判のあり方に尽きない。ちなみに、「全面否定」などあり得ない。また、「現実を否定する」とかいった議論は、個における思念の対談の中で触れている。そこでは、「まず」の書評が高橋氏の死後、その内容が「全面否定」であり高橋和巳氏を全く理解しておら氏がかわいそうだということ、及びこれが学生運動をしている人の感性の一部を代表しているだろうということ、が感想的意見として述べられている。

最初に言われているところの事実誤認（死後に書かれたものかどうかは自信がないはわかるはずだ）はさておき、あのような形でとりあげられたことについての桶民氏の反感については、内容が全く展開されていないので反論はしないが、少くとも氏が語ったところの「全面否定」に関しては、われわれの基本的な態度を改めて返せば事足りる。

これに回答して「高橋氏に『もっとエゴイストになれ』と勧めたかった」とまで言い出す秋山氏も同様だ。

□　□　□

われわれは、「生活」と「権利」を守る、労働組合運動としては発展しながらもその発展として、教員組織との連携による新たな教育闘争の構築を志向しているとは、この教育者運動の限界を、戦闘的教育者集団が一つ二つ突きつけていくためのテコとなるものだろうと確信しています。

3　教育労働者運動の課題とは何か

次に「教育労働運動の高揚と闘う労働者主体の形成」という高橋氏の主眼点にはいって行きたいと思います。

日教組運動が国民教育運動、あるいは新教特集の反対闘争、更にはこの十四日に自家答申させた教育制度検討委員会による「自家製答申」といった「憲法と教育基本法を守れ」という発想から出た徹底した護憲防衛路線によって無残に敗退し尽くしていく様はまた教育労働者運動の一つから出発を余儀なくさせている。日教組の反対闘争が、「生起する闘いを自己の戦闘に真正面から対峙していたとき、「警察機構が導入しても反戦ストなわちわれわれ教育者新聞労働者は排除する」という形でおとりつけ、われわれは、なおかつそれぞれの全の生産点において労働者による自らの労働を自らの手で管理して行く闘い自己の手でつくり出して行く闘いというものを獲徹していくその方向性によってその連帯、その共闘というものを強保して行きたい。そして、教育新聞の闘いこそが日教組運動を新たな観点から全く新たな第一歩、戦闘的な教育労働運動として再構築せんとしている多くの戦闘的な教育労働者と同時に地域の中でそうした教育労働運動と全ての労働運動との連帯を考える場合、教師集団による職場での労働者種の確立を目指す闘いと、これに呼応する労働者の「父母」としてのエゴイズムの打破が必然的に要請されているわけで、同時にこのことは、全ての労働者の職場における階級的視点に立った労働者種の確立をめざした闘いを前提としているのではないかと思います。すでに闘いの中の弱点がその崩壊的なあるわれが突出した闘いの中で生まれはじめようとしているのに、われわれ自身、「自己なる教育新聞の創出」というスローガンを単なる自己管理闘争として摘発革命的な強化を何とか打破しなければならわれわれ自身の新たな労働運動の構築という観点から再度、把え返すことによって、われわれ自らの中にある、そして全ての労働者の中にある「生活」と「家庭」領域の再検討を、闘う中で志向しつつ、闘いの中で見いだされてこなければならない問題の固定化と、三段論法を行い、あげくの果ては、「暴力主義者には彼らがその意志を代行している」と称する社会の最底辺の人びと……」と、ここでも闘いの何たるかに徹底的な無自覚さを示している。

□　□　□

三島由紀夫の死が戦後思想の反射鏡であったと言う人がいたが、今まで、高橋和巳氏の死を通して歴史化したものは、戦後思想の限界であったようにも思われる。そして、そのような限界とその視点をとらえそれが文学的精神神の再検討を、闘う中で志向しつつ、残念ながらこの「父母」としての「エゴイズム」を感受しつつ、暴力団と警察機構による闘争破壊動に直正面から対峙していたとき、その「エゴイズム」を感受しつつ、われわれは、これを何とか共に連帯し闘い、なおかつそれぞれの全の生産点において労働者による自らの労働を自らの手で管理して行く闘い自己の手でつくり出して行く闘いというものを獲徹していくその方向性によってその連帯、その共闘というものを強保して行きたい。そして、教育新聞の闘いこそが日教組運動を新たな観点から全く新たな第一歩、戦闘的な教育労働運動として再構築せんとしている多くの戦闘的な教育労働者と同時に地域の中でそうした教育労働運動として再構築せんとしている多くの戦闘的な教育労働者と同時に地域の中でそうした教育労働運動の主体である戦闘的な教師集団が、まさに同じ労働運動の一翼を担っている地域の組織された労働者から敵対的な関係においてしか対峙されてこないという現実があるわけで、われわれ自身これを何とか共に連帯し闘い、なおかつそれぞれの全の生産点において労働者による自らの労働を自らの手で管理して行く闘い自己の手でつくり出して行く闘いというものを獲徹していくその方向性によってその連帯、その共闘というものを強保して行きたい。そして、教育新聞の闘いこそが日教組運動を新たな観点から全く新たな第一歩、戦闘的な教育労働運動として再構築せんとしている多くの戦闘的な教育労働者と同時に地域の中でそうした教師集団が、まさに同じ労働運動の一翼を担っている地域の組織された労働者から敵対的な関係においてしか対峙されてこないという現実があるわけで、われわれ自身これを何とか共に連帯し闘い、なおかつそれぞれの全の生産点において労働者による自らの労働を自らの手で管理して行く闘い自己の手でつくり出して行く闘いというものを獲徹していくその方向性によってその連帯、その共闘というものを強保して行きたい。そして、教育新聞の闘いこそが日教組運動を新たな観点から全く新たな第一歩、戦闘的な教育労働運動として再構築せんとしている多くの戦闘的な教育労働者と同時に地域の中でそうした教師集団が、まさに同じ労働運動の一翼を担っている地域の組織された労働者から敵対的な関係においてしか対峙されてこないという現実があるわけで、われわれ自身これを何とか共に連帯し闘い、なおかつそれぞれの全の生産点において労働者による自らの労働を自らの手で管理して行く闘い自己の手でつくり出して行く闘いというものを獲徹していくその方向性によってその連帯、その共闘というものを強保して行きたい。そして、教育新聞の闘いこそが日教組運動を新たな観点から全く新たな第一歩、戦闘的な教育労働運動として再構築せんとしている多くの戦闘的な教育労働者と同時に地域の中でそうした教師集団が、まさに同じ労働運動の一翼を担っている地域の組織された労働者から敵対的な関係においてしか対峙されてこないという現実があるわけで、われわれ自身これを何とか共に連帯し闘い、なおかつそれぞれの全の生産点において労働者による自らの労働を自らの手で管理して行く闘い自己の手でつくり出して行く闘いというものを獲徹していくその方向性によってその連帯、その共闘というものを強保して行きたい。そして、教育新聞の闘いこそが日教組運動を新たな観点から全く新たな第一歩、戦闘的な教育労働運動として再構築せんとしている多くの戦闘的な教育労働者と同時に地域の中でそうした教師集団が、まさに同じ労働運動の一翼を担っている地域の組織された労働者から敵対的な関係においてしか対峙されてこないという現実があるわけで、われわれ自身これを何とか共に連帯し闘い、なおかつそれぞれの全の生産点において労働者による自らの労働を自らの手で管理して行く闘い自己の手でつくり出して行く闘いというものを獲徹していくその方向性によってその連帯、その共闘というものを強保して行きたい。

教育現場の自己権力を全労働戦線の一翼として

（基調報告・完・つづく）

基調報告を行なう日本教育新聞労組書記江副委員長

（前面からつづく）

無装解散の背景をもう少し詳しく考えていくために日本教育新聞の歴史的な移行、その性格について簡単にまとめていきたいと思います。日本教育新聞は昭和二十一年敗戦まもなく元翼賛壮年団長愛書であった大山恵佐の敗戦の母スポートとして、民主主義社会へのパスポートとして利潤と利権をあろうとする資本の戦後的な再生として教育界に登場していった。すなわち、日教組の教育会館であるこの調査なわけですけど、こうしたあたかも「民主」勢力の拠点があるような所に本社を構えることによって、そしてそのことは戦前の翼賛壮年団長の秘書であった大山というニュアンスの自らの転身として同時にそれが敗戦の支えとされた「民主主義社会」のパスポートとして新聞自体の性格がおのづと当初からいわゆる「民主主新聞」という形で規定されていたということをおさえておきたいと思います。当然にも一九五〇年前後の日本の戦後史自体が共民の砦として再編成されていく過程の中で教育新聞はまさに「すいかりの」であることが、闘いの解釈を歪曲を実証するかのように全くもって「暴力学生」攻撃と同じ地点に立ってしまうなど、逆に言うなら、今まで、高橋和巳氏の死を通して歴史化したものは、戦後思想の限界であったようにも思われる。そして、そのような限界とその視点をとらえそれが文学的精神神の再検討を、闘う中で志向しつつ、残念ながらこの「父母」としての「エゴイズム」を感受しつつ、暴力団と警察機構による闘争破壊動に直正面から対峙していたとき、その「エゴイズム」を感受しつつ、われわれは、これを何とか共に連帯し闘い、なおかつそれぞれの全の生産点において労働者による自らの労働を自らの手で管理して行く闘い自己の手でつくり出して行く闘いというものを獲徹していくその方向性によってその連帯、その共闘というものを強保して行きたい。そして、教育新聞の闘いこそが日教組運動を新たな観点から全く新たな第一歩、戦闘的な教育労働運動として再構築せんとしている多くの戦闘的な教育労働者と同時に地域の中でそうした教師集団が、まさに同じ労働運動の一翼を担っている地域の組織された労働者から敵対的な関係においてしか対峙されてこないという現実があるわけで、われわれ自身これを何とか共に連帯し闘い、なおかつそれぞれの全の生産点において労働者による自らの労働を自らの手で管理して行く闘い自己の手でつくり出して行く闘いというものを獲徹していくその方向性によってその連帯、その共闘というものを強保して行きたい。

新たな教育闘争を
教育労働者との連携を通じて

そして、また、四十二・四十三年の専門職キャンペーンが現在の新教特集の起点ともいえるべき、「権利を勝得する闘い」から「権利を奪われる闘い」というものが志向され、現実的に秋の人事制度粉砕となって結集していき、そしてそれが現在の「自由な教育新聞の創出」というスローガンとなってわれわれの「現場奪還」あるいは「難解散粉砕」というスローガンを通じ自己の提起としたものとして評価しておかなければならないと思います。

われわれは一月十八日の突発的な緊急解散以来、一一・三日に対して徹底した職場占拠による強烈な防衛の闘い、そして更に四月闘争―五月闘争―六月闘争という形で展開していった日本教育新聞のチャンピオン新社による発行ストップの闘いというものを、われわれが個別的闘争論から教育労働運動へ大胆に飛躍するバネとして位置づけていくということを報告しておきたいと思います。すなわち、この間の闘いが必然的に突きたって来た結果として、われわれの現在の教育労働運動の二環としての教育新聞闘争という認識があるし、同時にこの教育労働運動と全ての労働運動との連帯が確認されていくことがとりうる場合、教師集団による職場での労働者種の確立を目指す闘いと、これに呼応する労働者の「父母」としてのエゴイズムの打破が必然的に要請されているわけで、同時にこのことは、全ての労働者の職場における階級的視点に立った労働者種の確立をめざした闘いを前提としているのではないかと思います。すでに闘いの中の弱点がその崩壊的なあるわれが突出した闘いの中で生まれはじめようとしているのに、われわれ自身、「自己なる教育新聞の創出」というスローガンを単なる自己管理闘争として摘発革命的強化を何とか打破しなければならわれわれ自身の新たな労働運動の構築という観点から再度、把え返すことによって、われわれ自らの中にある、そして全ての労働者の中にある「生活」と「家庭」領域の再検討を、闘う中で志向しつつ、残念ながらこの「父母」としての「エゴイズム」を感受しつつ、暴力団と警察機構による闘争破壊動に直正面から対峙していたとき、その「エゴイズム」を感受しつつ、われわれは、これを何とか共に連帯し闘い、なおかつそれぞれの全の生産点において労働者による自らの労働を自らの手で管理して行く闘い自己の手でつくり出して行く闘いというものを獲徹していくその方向性によってその連帯、その共闘というものを強保して行きたい。そして、教育新聞の闘いこそが日教組運動を新たな観点から全く新たな第一歩、戦闘的な教育労働運動として再構築せんとしている多くの戦闘的な教育労働者と同時に地域の中でそうした教師集団が、まさに同じ労働運動の一翼を担っている地域の組織された労働者から敵対的な関係においてしか対峙されてこないという現実があるわけで、われわれ自身これを何とか共に連帯し闘い、なおかつそれぞれの全の生産点において労働者による自らの労働を自らの手で管理して行く闘い自己の手でつくり出して行く闘いというものを獲徹していくその方向性によってその連帯、その共闘というものを強保して行きたい。

（基調報告・完・つづく）

京都大学新聞
1500号記念特集号発売中
販売書店一覧
仙台　▷八重洲書房
東京　▷ウニタ書舗／吉祥寺ウニタ／勝進堂／文献堂／二朗書店／大観堂／大盛堂／高野書店／模索舎ほか
名古屋　▷名古屋ウニタ
岐阜　▷岡田書店　広島　▷平和書房
京都　▷ナカニシヤ／京都書院／ふたば書房／三月書房／関西書籍
大阪　▷曽根崎書店／大阪ウニタ／三栄書房／西日本書店ほか
神戸　▷イカロス書房　各大学生協

ひとりぼっちで淋しいとき……
おしゃべり仲間と会ったとき……
もちろん恋をしたとき……
静かでゴージャスな
喫茶　ケルン　1F　761－4570　京・銀閣寺道電停前
レジャービル
銀閣のホトリ散歩して……
四人そろへば……唯だまって
意気の合う奴が集る……
麻雀センター　2F　761－1872
ケルン
本格派……
おとな感覚とエレガンスな
フィーリングで
ユックリ楽しめる
高級ビリヤード　3F　761－3874

京都大学新聞（週刊 六頁　20円）
定期購読募集中！
一年間 700円　二年間 1300円　四年間 2350円（郵送料含む）
京都市左京区吉田京大構内　郵便振替 3909　TEL（075）761－2054　京都大学新聞社

あなたを海外へ派遣する予定です
当社では
国際的感覚を備えた商社マンの育成には力を注ぎ、若くして海外で活躍する機会が開かれています。
年商850億　この輝かしい実績と若さを原動力として躍進を続ける貿易専門商社です
業容　鉄鋼・製鉄原料・機械・プラント等の輸出入
海外支店　ニューヨーク・ロンドン・パリ・メルボルン　シドニー・マドリット・モスクワ・北京　カラカス・ブカレスト・ヨハネスブルグ
＊積極的な会社訪問を歓迎します。
TOMAS　東京貿易株式会社
本社／東京都中央区日本橋兜町2-21　TEL(552)7211
採用関係連絡先―総務部人事管理課

激動の昭和史を伝える
京都大学新聞
縮刷版　全六巻　完結！
大正14年創刊号より全紙を収録
●体裁　各巻A4判レザークロス張 金文字入　平均900頁（索引・年表を含む）
京都市左京区吉田京大構内
発行　京大新聞縮刷版発行委員会
TEL 075-761－2054